

## 体育方法専門分科会とコーチング学会との関係について考える

～体育方法専門分科会会報からの転載原稿～

図子 浩二<sup>1)</sup>

体育学会・体育方法専門分科会と日本コーチング学会のこれまで3年間に渡る歩みの中では、コーチング学を再考し体育方法学とコーチング学との関係について論考するとともに、体育方法専門分科会、コーチング学会、実践系諸学会との関係やそれぞれが有機的な協力体制をどのように構築していくのかについて論じてきた。体育方法専門分科会は、日本体育学会の法人化に伴う対応として、3年間の準備段階を経ながら日本コーチング学会との相互一体化に向かっている。そもそも日本コーチング学会は、体育方法専門分科会から発足しており、目的および研究内容や研究方法、実践に生きる指導者が集う場であるという共通性から考えても、適切な方向への移行であると判断することができよう。

現在、体育方法専門分科会会員は約1,200名（これは他の分科会に重複して入っている会員を含む）、日本コーチング学会会員は600名である。そして、日本コーチング学会のみの会員は300名、両方を兼ねている会員は300名と概算できる。コーチング学研究は年に2回の刊行であり、その1つは体育方法専門分科会会報との合本本として刊行してきた。ところがコーチ

ング学研究への投稿数が激増し、掲載論文が増えたことと同時に、特集なども加えたことから、今回から合本形式は行わないこととした。そのために、約300名の会員は、前述の内容であるコーチング学会と体育方法専門分科会との関係を記した分科会会報の内容を読むことができない状況になった。したがって、分科会会報から4編の論説を、このコーチング学研究に転載することとした。転載原稿は、体育方法専門分科会会長である朝岡先生による“体育方法専門分科会の「来し方」・「ゆく末」”、“コーチング学のない体育学／一般理論のないコーチング学”という2編の論説、体育方法専門分科会理事長である青山先生による“実践系学会との協力体制から考える体育方法専門分科会の果たすべき役割”、そしてコーチング学研究編集委員長である図子の“体育方法学研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた”、計4編の論説である。

御一読して頂き、体育方法専門分科会と日本コーチング学会が進んでいる方向を理解し、今後のあるべき姿について考えてみてほしい。また、それに賛同して頂けた方々には、是非とも両方を兼ねた会員になって頂くことをお願いしたい。

1) 日本コーチング学会編集委員長（筑波大学）